２０１９．１１．１３
畑　啓之

ロケット発射場を観光資源として活用（和歌山県串本町）は「捕らぬ狸の皮算用」ではない

大阪の地からそんなに遠くない和歌山県串本でロケット打ち上げが年に 20 回も見られるチャンス。これと、ホエールウォッチングなどの海の魅力を重ね合わせれば立派な町おこしができることは間違いがないだろう。

問題は資本。和歌山県白浜に観光資源が集まった如くに資本が集まる仕掛けを作ることができるか。白浜には海水浴場あり、アドベンチャーワールドあり、空港あり、宿泊施設あり、しかも交通の便に恵まれるという、長年にわたって蓄積された強みがある。

日本経済新聞
2019年（令和元年）11月13日（水曜日）

ロケット発射場、南紀白浜空港と周辺の観光地

和歌山県串本町の人口

（注）3月時点

ロケット発射場 観光火付け役

串本町 建設に向け知恵

ウエーブ 和歌山

人口減に悩む和歌山県南部で、ロケット発射場の新設を地域振興に生かそうという機運が高まってきた。年間の打ち上げ予定回数が多く、観光客やビジネス関係者の来訪が期待できるためだ。ただ建設地の串本町は本州最南端にあり宿泊施設も少ない。交通アクセスを含め受け入れ体制の充実が課題だ。県や玄関口となる南紀白浜空港（白浜町）の運営会社など、官民で整備を急ぐ。

パーク＆ライド導入検討

国道42号に近い発射場では近く、ロケット組み立て棟などの建設が始まる。事業主のロケット会社スペースワン（東京・港）は、キヤノン電子、IHIエアロスペース、清水建設、日本政策投資銀行が出資。2021年度に打ち上げを始める方針だ。

「現在、国内にあるロケット発射場は種子島、内之浦（ともに鹿児島県）の2カ所。ともに宇宙航空研究開発機構（JAXA）が運営し、種子島では年数回の頻度で大型ロケット「H2」、内之浦では数年に1回程度の割合で全長約24～26㍍のロケット「イプシロン」を打ち上げている。

宇宙ビジネスのシンポジウムが開かれるなど、経済波及効果に期待が高まる（8月、和歌山県串本町）

年20回打ち上げ

一方、スペースワンは小型ロケットを年間20回打ち上げる計画だ。大型ロケットは国や研究機関のプロジェクトが優先されることが多く、打ち上げのタイミングが企業の希望通りになるとは限らない。串本町のロケット発射場は、契約から打ち上げまで「世界最短」と

鹿児島2施設 人気定着

常設展示など集客工夫

1966年に建設が始まった種子島宇宙センターは、最初のロケット打ち上げ成功から50年以上たつ。島内に打ち上げ見学場は4カ所あり、1回の打ち上げで1500～2000人が来訪する。最近の経済波及効果のデータはないが、宇宙航空研究開発機構（JAXA）は2005年度に種子島に約131億円の効果があったとしている。

62年開設の内之浦宇宙空間観測所で今年1月の打ち上げ時に来たのは約3000人。数は落ち着いており、目立った混雑もないという。

ロケット発射場は事故があると再開まで時間がかかり、打ち上げ計画に延期されるリスクもある。

ただ2つの発射場はともに展示施設が整備されており、種子島宇宙センターでは年間約6万人が訪れる。打ち上げがないときの集客にもつながっており、串本町の発射場でも同様の施設整備が次の課題になりそうだ。

（細川博史）

なるサービスをめざす。県は建設投資や観光などによる地元への経済波及効果を10年間で670億円と試算する。南紀白浜空港の18年度の搭乗客数は過去最高の16万人。同空港を運営する南紀白浜エアポートの岡田信一郎社長は「ロケット関係者の利用増が要因の一つ」と明かす。

課題は現地へのアクセスだ。大阪から紀伊半島の南端にある串本町までいくJR特急は1日6本。自動車の利用が予想される。数千台規模の車が来れば、人口1万6千人の串本町は混乱が予想される。そこで南紀白浜エアポートや県が検討するのが、南紀白浜空港の隣接地に駐車場を整備しバスで串本へ来訪客を運ぶ「パークアンドライド」構想だ。

県や地元自治体、経済団体はロケット発射場を地域振興に生かすため、10月に周辺地域活性化協議会を設立。隣町の那智勝浦町は、廃校になった町内の小学校校舎を打ち上げの見学施設にするアイデアを打ち出した。串本町のロケット推進室はロケット関連の観光施設整備やパブリックビューイングの実施も視野に入れる。

宿泊施設不足も懸念される。米ホテルチェーンのマリオット・インターナショナルと積水ハウスが串本町やすさみ町の道の駅にホテルを新設する計画などがあり、供給増の一助になりそうだ。

周遊も売り込む

南紀白浜エアポートはJR西日本や明光バス（和歌山県白浜町）と連携し、紀南を1泊2日で周遊するモデルコースを売り出し中。ロケット発射場ができればコースに組み込み、紀南を広く楽しんでもらう考えだ。

南紀白浜エアポートは10月、人工知能（AI）やビッグデータを活用した新しいまちづくりをめざす国家戦略特区制度「スーパーシティ構想」のアイデア募集にも提案した。白浜町のホテル・旅館で進める顔認証の決済システムを、串本町を含めた紀南全域に広げる絵を描く。

串本は規模では白浜には及ばないが、身の丈に合った発展のチャンスが訪れたということだ。都会からの資本と地元の力がうまく融合できれば、串本にとっては素晴らしい未来が拓けてくる。千載一遇のチャンス、これを地元の活性化に取り込むことができれば明るい未来が見えてくる。